[四章　聖地消沈](file:///C:\\Users\\%E9%A2%9C%E5%BB%BA%E5%BF%A0\\Documents\\%E5%B0%8F%E8%AF%B4\\%E5%A4%84%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E6%97%A5%E6%96%87%E5%8E%9F%E7%89%88\\(%E7%94%9F%E8%82%89)5%E5%87%A6%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%82%8B%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%EF%BC%89%EF%BC%95_%E2%80%95%E7%B4%84%E6%9D%9F%E3%81%AE%E5%9C%B0%E2%80%95_(GA%E6%96%87%E5%BA%AB%20-%20%E4%BD%90%E8%97%A4_%E7%9C%9F%E7%99%BB%20-%20%E5%89%AF%E6%9C%AC\\OEBPS\\text00023.html" \l "toc-005)

　聖地を囲んでいた魔物は、あらかた動かなくなっていた。

　モモとサハラの戦闘に巻き込まれてか、二人を無視して先に進んだか。さらに加えて二人は知らないが、エルカミとの戦いで『 』が生贄として消費した魔物も多い。

　様々な要因から彼女たちの周囲から生きた魔物はいなくなった。

　邪魔者のいない一騎打ち。距離を詰めようとするモモへの を続けながら、サハラは適度な距離をとり続けていた。

　メノウと戦った時には接近戦を選んだが、モモと戦うならば距離を保ったほうがいい。 あらば強力な教典魔導を発動させてくるメノウと違い、モモのもっとも恐ろしい攻撃は導力強化をした だ。

　反面、拳の届かない距離だとモモの攻撃手段はぐっと乏しくなる。

　モモの導力強化を打ち抜ける威力の調整もできた。当たれば痛いではすませない銃弾を導力銃と化した右腕から吐き出す。威力を増せば導力の消費も多くなるが、サハラにはまだ余裕がある。

　そろそろモモが盾にしている木が倒れるかというタイミングで、幹に糸鋸が みついた。

　一本だけではなく、二本。大人の両手で二抱えの太さはある木を糸鋸で支えて盾にし続けるつもりかとモモの行動から測ったサハラの妥当な予測は裏切られた。

　モモはサハラの敵意に真っ向からにらみ返しながら、糸鋸に導力を流した。

『導力：接続──糸鋸・紋章──発動【固定】』

　紋章魔導の効果で、柔軟な糸鋸は木に絡みついた形で固定された。

　無言のままモモが腕を上げる。樹木は銃弾を受けて くなっていた部分でばきりと折れ、柄となった糸鋸が重量で大きくしなる。

　盾ではない。モモがつくったのは、鈍器だ。

　樹木に糸鋸を巻き付けて出来上がった即席の巨大ハンマーを小柄なモモが両手で旋回させる。

「 れぇ、ちまえです！」

　気合一声、遠心力を付けた勢いのまま横に大きくスイングした。

　とっさに飛びのいたサハラは事なきを得たが、運悪く巻き込まれた魔物の死骸が飛び散った。

　まるで巨人の だ。あまりの威力にサハラが顔をしかめる。

　ハンマーの間合いを測るために後ずさりしながら、ぼそりと する。

「力任せの鈍器とは、チビゴリラにぴったりの武器ね。糸鋸を使うの、やめたら？」

「ふぅーん？」

　耳ざとくサハラの声を拾ったモモが を地面に落とす。小憎たらしい笑みを浮かべる。

「武器を変えられると嫌味とか、自分の対応力に自信がないんですね。怖いなら怖いって、しょーじきに言ったほうがいいですよ？」

「まさか。これは親切での忠告よ」

　導力量に恵まれ、他を圧倒する導力強化による力任せの戦いがもっとも強いはずのモモが、糸鋸なんていう重量のない武器を使っているのはなぜか。その理由を察しているサハラは、せせら笑う。

「導力量が取り柄の暴力女が、小器用なメノウの【導糸】の しても似合わないから」

「へえ」

　メノウを引き合いに出されたモモが に笑う。

「なぁーにを知ったつもりなのか知りませんけどぉっ、私、先輩のことを知ったかぶられるのがいっちばん嫌いなんです。お前は存在がムカつくんで、これから全身をスクラップにしてくれますよ！」

「できないことは言わないほうがいい」

『導力：素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル： 打ち】』

　右腕から放たれた杭が、迫り来る槌を打ち抜き粉々に砕く。

「恥をかくだけだから──あ」

　サハラの が引きつった。

　モモが糸鋸で造った即席のハンマーの倒木部分を砕いたら、結果としてなにが残るか。

　答えは、木材を絡めとっていた糸鋸である。サハラに芯材が砕かれると見越して振り下ろされた即席ハンマーは、槌の部分を失うことで彼女の周囲を囲む と早変わりした。

「ばーか」

　今度はモモが嗜虐的な嘲笑を浮べる番だった。

　思惑通りの展開だ。発動していた【固定】を解除させると同時に、糸鋸に刻まれたもう一つの紋章を発動させるべく導力を通す。

『導力：接続──糸鋸・紋章──』

　発動よりも早く囲いを抜けなければ、死ぬ。我に返ったサハラが糸鋸を払いのけるために手を伸ばす動きは、文字通りの手遅れだった。

『発動【振動】』

「ぃっづ！」

　高速振動する糸鋸に、義腕が弾かれた。

　生身の左手で触っていたら、間違いなく肉がこそげ落ちた。義腕といえど接触ダメージがないとはいかず、右肩まで伝わった衝撃によろめく。

　サハラとの記憶など忘却の彼方に追いやっているモモに、手を める理由はない。

「じゃ、死んでください」

　無情に言い放ったモモが糸鋸を り、囲いを引き絞る。

　まるで長大な蛇の締め付けだ。逃げ場はない。神官服と違い修道服に【障壁】の紋章はないため防御の手段もなかった。獲物を八つ裂きにしようと振動する糸鋸がサハラに迫る。

　だからこそサハラは、迷わず攻勢に出た。

『導力：素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル・近距離散弾型】』

　 に膨らんだ右腕を構えて、引き金を絞る。

　今度の武器腕は、近距離制圧に向いた散弾銃だ。モモは導力銃が直撃しても死なないという反則くさい導力強化の持ち主であるが、今回の狙いは彼女ではない。

　導力の散弾を発射。

　糸鋸の囲いがたわむ。威力はあっても、重量がない武器は吹き飛ばすのが容易だという欠点がある。高速振動をしている糸鋸とまともに接触すればボロボロになるが、導力銃ならば直接触れずに弾くことができる。

　モモは舌打ちをしつつも、サハラの全身を挽き肉にする計画は潔く放棄。作戦を嫌がらせに変更して、手首の動きで糸鋸を操り相手の右腕に絡めた。

『導力：接続──糸鋸・紋章──二重発動【固定・振動】』

「こ、ンガッ、ご！」

　やたらと丈夫で変形する右腕の切断はかなわずとも、絡みつかれれば糸鋸の振動が全身に伝わる。右腕の振動が全身に伝わり、歯の根もかみ合わない状態となったサハラは悪態すらもままならない。

　絡みついた形で【固定】がかかっているので、糸鋸を引きはがすのも簡単にはいかない。

　タチの悪い嫌がらせだ。サハラは再度、腕を変形させようと意識を義腕に寄せる。腕の形に戻して引き抜く。小さくなれば自然と抜け落ちるはずだという考えが、誘導されたものだった。

「バカの考えは単純で楽です」

　じゃり、と金属のこすれる音が耳に入った。

　 に、息苦しい圧迫感。ひやりと冷たい感触はモモの殺意がサハラの首に絡みついた証左だ。

　首に、糸鋸が巻かれている。

　モモはサハラの背後にいた。

　動きの意識を完全に読まれた。読まれた以前に、右腕の変形に意識が割かれるように行動を誘導されていた。サハラが右腕に意識を集中させたわずかな隙を数手前から読んでいたモモは、本日最高速の踏み込みを披露。接近し、通りすがり様に予備の糸鋸を取り出してサハラの首に巻き付けた。

　サハラの左手が、自分の首に絡みつく残酷なほどに細くも荒い刃へと伸びる。無駄なのも、手遅れなのもわかっていて、それでもどうしようもなく助かる道を求めた指先が届く前。

「死ぬのはやっぱり、お前でしたね」

『導力：接続──糸鋸・紋章──発動【振動】』

　ぶうんと振動する音とともに、血しぶきが舞う。

　サハラの首に巻いた糸鋸の輪が いようもなく狭くなっていく。声帯を圧迫する糸鋸は絶叫すらも上げさせない。肉を挽いて き飛ばす残酷な水音はやがて を削る硬質なものへと変化し、数秒後。

　挽き れた首が、地面に落ちる重い音が響く。

「ま、こんなもんですね」

　モモは首を落とした感触に浸ることもなく、ひゅんっと糸鋸を振るって血を落とす。

　多少、てこずったが文句なしの勝利である。ここまでやれば魔物の襲撃と自分は無関係だとエルカミも納得するだろう。戦勝報告のために首を拾おうと身をかがめた瞬間、背後で魔導構成の気配を感じた。

　とっさに振り返る。

『導力：素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル：射出】』

「おぅ？」

　義腕のみがサハラの死体から射出された。

　わずかに驚きつつも、直前で警戒していたモモは飛んできた腕を容易にかわした。大した威力でもない腕は、そのままモモの後ろにいた魔物に張り付く。

　モモは念のため大きく飛び跳ねて距離をとる。

　魔導具が持ち主を殺したあとに起動することは にある。起動の条件に、自分の死と同時に発動するように設定することが可能なのだ。

　自分の死をトリガーにした条件起動型は、九割方自分を殺した相手を諸共に巻き込む自爆である。魔導具である右腕が大 する覚悟をして距離をとったのだが、へなちょこロケットパンチの後になにかが起きる気配もない。

「……？」

　拍子抜けだ。再度サハラの死体を目視する。

　確実に死んでいる。首を失った体の四肢はだらりと垂れ下がり、ズタズタの傷口を す生首はピクリともせず眼球を見開いている。

　どういうことだと首をひねりつつも、気を抜きかけた時だ。

『導力： 供犠──原罪ヶ印 ・肉体──召喚【肉人形】』

　唐突に、右腕が魔物の肉体を み んだ。

　予想外の現象にモモは息を呑む。

　よく似ているとすれば、原色の魔導兵の作製現場だ。義腕を中心に瞬く間に肉をこねくりあげて、人の形をつくる。おぞましい製造過程でありながら、十秒もかけずに出来上がったのは、一糸まとわぬ見目麗しい少女だ。

　適度に鍛えられた肢体に年相応に膨らんだ胸部。

　ウェーブがかかった銀髪を揺らし、ちっと しげに舌打ちをする。

「敵の残機くらい確認しておくことね、単細胞ッ」

　体を再生させたサハラは、憎悪を込めてモモをにらみつけた後に濃霧にまぎれて消えた。

　自爆を警戒して距離を開いていたのが悪かった。時間が つごとに濃くなる霧の中にまぎれられては、追うかどうかの判断に迷う。

　 していたモモは、迷っている時点で追うべきではないと判断する。最後の魔導といい思った以上に得体が知れない。

　サハラの気配が完全に消えたのを見て戦闘態勢を解いた。

「……キッモ。びっくり箱人間ですか、あいつ」

　逃げ去られたモモは濃霧をにらみつけながら し れに吐き捨てた。

　まずないとは思うが、魔物の肉体を乗っ取った攻撃。

　あの腕にモモが触れていたら体を乗っ取られた可能性がある。それを思うと、ぞっとしない。

「ていうか、残機ってなんですか残機って……」

「はっ、あの程度を逃がしたか。『 』の教育もたかが知れるな」

　霧の向こう側から声をかけられた。よく通る老女の声だ。 かなど、確認するまでもない。

「あー……」

　ぽりぽりと頰をかく。モモモもさすがにバツの悪さを隠せない。

　格下を逃がした自覚はある。油断だと言われてしまえば反論のしようもなかった。

「あれは、珍しいな。魂が原色概念でできた義腕に宿って、原罪概念で人間の体をつくっている。まだ不完全だが……成長すれば厄介なものになりそうだ。逃がしたのは失態だな」

「はぁ。申し訳ないです。ていうか、残機ってなんだったんですか？」

「魔導兵を倒すときは、三原色の輝石の核の数を気にしろ。すべて潰さねば動き続けるぞ」

「ああー……確かに」

　言われてみればその通りだ。複数の核がある魔導兵は珍しくない。つまるところ、モモと戦っていたサハラの本質はすでに生身の人間ではなく魔導兵と同一なのだ。

「まあ、いい」

　もっとねちねち言われるかと思ったが、あっさりと許しが出た。これ幸いと話題を変える。

「さっきの奴って、不死身法の一種ですか？　魔導兵を使った禁忌ですよね」

「補佐といえ、処刑人ならば知っているだろう。老いる肉体を別のものに移り替える発想は、禁忌としてはありふれている。どのような儀式で、なにに移し替えるかで血道を上げる研究者も多いが、くだらんゲスの失敗ばかりだ。……そんなことに、不死の本質はないというのにな」

　魔導は人間の精神と魂につながっている。肉体も無視できない要素だが、人間の体はあくまでも魂を継続させる器だとみなされている。

　より重要視されるのは魂と精神の二つだ。

　肉体は、究極的にいえばその二つを維持するための端末でしかない。

「あれの本体は人間の体ではなく、作り物に見える義腕だな。次があれば、そちらを壊すようにしろ」

「はぁい」

　どうりで首を挽き落としても魔導を連発したわけだ。納得したモモは適当に頷く。

「ところで、私の疑いは晴れましたか？」

「半分晴れた。もう半分は、お前程度がなにをしても私に届き得ないということを確認できた。十分だ」

「……それはなによりです」

「わかればいい」

　もっとなにか言ってやろうか。そう思ったモモは、振り返ってあ然とした。

　全体像もつかめぬほど巨大な魔物が、一本の光剣で両断されていた。

　モモは立ち尽くす。ただ巨大だというだけで、なすすべもなく威圧される太古の魔物だ。死骸となっても、スケール感の違いは見る者の現実感を喪失させる。

　単体で町一つ滅ぼせる魔物を両断する光輝の剣は、神話の光景に見えた。

　ほうけたモモに、エルカミは魔導を解除する。剣をかたどっていた導力の残光が雪のように降りそそぐ。

「なにを立ち止まっている。戻るぞ。聖地に入り込んだ魔物を処分する」

「……はぁい」

　これが、大司教。

　オーウェルと戦った時の自分たちが、どれほど幸運だったのかを悟る。

　教典魔導の神髄は、時として尋常な禁忌すらも する。

　神話的な光景をつくりだした張本人の言葉となれば、逆らう気も起きない。モモにしては比較的素直に返答した。

「先ほどの戦闘を見ればわかるが、貴様は導力操作をまるで磨いていないな」

「……そうですけど」

　生まれ持って導力量に恵まれているモモは、幾度となく導力操作を磨けという忠告を受けている。

　よくあるお説教かと渋い顔をしていたが、続けられた台詞は意外なものだった。

「それで、いい」

　エルカミは容認と、なぜか羨望の視線を向けてきた。

「お前ほどに導力に恵まれているのならば、そのほうがいい。過ぎた導力は人間には必要がない。 などが最たるもの。人には人のままでいられる【力】の許容量というものがある」

　なにが言いたいのかわからない。殴ったら早いというモモの持論に賛成してくれているわけではないだろう。

「そこを逸脱すれば、すべてを置き去りにすることになる」

　それはモモに言い聞かせているというよりは、独白に近かった。

　適当に聞き流してエルカミの背中についていこうとしたモモは自分の身だしなみを見て、無事に残った修道院に目をやる。

「あのぉ、ちょっとシャワーを浴びてきてもいいですか？」

　大聖堂に戻れば、メノウとすれ違うことだってある。そんな時にボロボロの自分など見せたくはない。

「……好きにしろ」

「じゃ、好きにしまーす」

　ブレることのないモモを置いて、エルカミだけが先に戻った。

　魔物の侵入にも、聖地にいる神官たちが混乱を起こすことはなかった。

　 はどのような異常事態にも対応できるように訓練が施されている。厳しい試練を突破したからこそ、彼女たちは を名乗れるのだ。フーズヤードのようなヘタレは、ごくごくまれな例外である。

　入りこんだ魔物が『 』謹製といえども、一匹一匹を生みだす際の生贄が足りていない。原罪概念の性質上、魔物というものは人を害した数だけ強くなる。生まれたての魔物は積み重ねた原罪があまりにも薄いため、どうあがいても弱い。

　その程度の魔物数匹に れを取るものなど、それこそ訓練課程にいる幼い修道女くらいなものだ。

　だが、 以外はそうもいかない。

　魔物の数が数だけあって、わずかなりとはいえ聖地にいる巡礼者には被害が出ていた。信仰篤くとも彼らの多くは戦闘訓練を受けたことのない一般人だ。魔物に対抗する術を持たない者にとって一匹でも対処の手に余る。

「はあっ……ふ、う……！」

　いまも路地から一人、魔物に追われた少女が大通りに向けて走っている。まだ若い彼女は命からがら、息を切らせている。必死に背後から迫る脅威から逃れようと全力を尽くしていた。

　あと一歩で、神官たちがいる大通りに出るというところ。

「あっ」

　足をもつれさせて、 いた。

　かわいらしい悲鳴など されず、少女の背に魔物が迫る。

　だが血しぶきがまき散らされる悲劇的な事態は起こらなかった。

　小さな悲鳴に目ざとく気がついた近くの神官が助けに入り、少女を追いかけていた魔物を始末したのだ。

「大丈夫ですかっ」

　危機一髪で助けの手を入れた神官は声をかけながら のない路地裏に入り、倒れている少女に近づく。

　いましがたまで魔物に追われていたのは、珍しいことに着物を着ている少女だった。育ちがいいのか、神官服の色合いにも似た深い青色の髪を三つ編みにしている彼女は、地面にへたり込んだままだというのに丁寧な所作で頭を下げる。

「あ、ありがとうございます。助かりました」

「神官として当然のことをしたまでですから、お気になさらず」

　明らかに聖地にいる ではない。ここまで巡礼に来て巻き込まれたのだ。

「外の魔物もすぐに駆逐されるから、奥の方に避難してください。神官が多いところならば、まず安全です。このような路地には、いまは決して入らないようにしてください」

「はい、承知しました。重ねて、お礼申し上げます。ただ、その……情けないことに、腰が抜けてしまいまして……」

「ああ、なるほど」

　少女の危機を救った神官は、まだ自力で立ち上がれない様子の彼女にまったくの善意で手を伸ばす。

「こんな親切な方に出会えて、本当によかったです」

　少女の伸ばした手は、神官の差し出す手を通り過ぎ、そっと を挟む。

　混乱しているだろう。少女を安心させるために肩に手を置いた神官は、自分の足元で着物の少女の影が不自然な動きで後ろへと伸びていることに、気がつかない。

「さ、手を貸しますから、立ち上がって避難をしましょう？」

　優しげに励ます神官の背後で音もなく影が浮かび上がる。死角で虚無の大口に われているとも知らない彼女は、親切と善意のこもった激励を少女に投げかけようとして、

「ご親切に、ありがとうございました」

「──え」

　ばくん、と全身が食われた。

　 までなにが起こったのか把握できずに不思議そうな顔をした首だけが、マノンの手に残る。マノンが残った頭を丁寧な所作で足元に置くと、彼女の影にずぶずぶと沈んでいく。

「ふふっ、ごちそうさまです」

　腰が抜けていた気配などなく立ち上がった彼女は、外を振り返る。城壁のない聖地ならばこそ、外の様子がよくわかる。

　特に目立つのは両断された巨大な魔物の死骸だ。

　迎撃に出た神官は、恐ろしく高度な魔導行使者らしい。マノンはふるりと身震いをする。

「やはりわたくしなどでは、かないっこありませんね。神官のみなさまは、本当にお強いです」

　マノンとて、自分がそれなりの罪を重ねて強くなった自覚はあったが、あの光景は いだ。

　 の召喚した魔物に加えて、それを容易く封殺してみせる魔導行使者。

　それでなくとも、聖地にいる神官はいまさきほど捕食した女性も含めてマノンより格上だ。特別な強さを持たないマノンがまともに戦って勝てる相手など、どれほどいるものか。

　彼女たちの強さに感動で体を震わせながらも、恐れはない。

　どこまでも、強いだけだ。

　高潔な彼女たちには、 さが足りない。

「だからわたくしとは相いれないのでございます」

　本来、マノンは聖地に入ることすらできない。いま生命を維持している仕組みが、本質的に魔物だからだ。聖地の結界は魔物の侵入を拒んでいる。

　マノンは知っている。

　聖地とは、そもそもがかつて四大 を退けるための拠点として構成された場所だ。魔物を、ひいては四大 である『 』を拒否する造りになっているのは当然の効果である。

　だからマノンは、自分が聖地に入れるようにことを企てた。

　外で戦っていた が南の果てにある『 』から召喚した、太古の魔物。小指の彼女を目印にしてつなげることで、霧の結界の効果範囲が飛び地でつくられた。

　南の果てにいる を封印するためならば、どこまでも き上がる霧の結界だ。 である彼女をなによりも優先して拘束し続ける強力な魔導でありながらも、魔物を拒む結界ではない。

　魔物を外に出さずに、内側に閉じ込める結界だ。

　魔物を閉じ込めるためにある霧は、言い換えるならば内部に魔物が存在することを前提として構築されている。そのために聖地に入り込むことによって、霧のかかった場所ならば魔物がいることを許してしまっていた。

　本来ならば入れない場所に足を踏み入れるために、魔物で聖地を攻めるという派手なことをした。魔物で聖地攻めなどという勝算のないことをしたのは、 に打撃を与えるためではない。マノンが聖地に入る下地をつくるためだけの一手だ。

「さてさて、わたくしを差し置こうなど『盟主』さんもメノウさんも しいことをしてくださいましたね」

　罪を重ね続ける着物姿の少女が、大聖堂に足を向ける。

　聖地は狭い。お目当ての建物はすぐに見つかった。

　聖地のシンボルとしてそびえる大聖堂には、きっとメノウと『盟主』がいるのだろう。

「とりあえず、メノウさんは驚かせて、『盟主』さんには文句を言いましょう」

　さて、どうやって入ろうかと大聖堂を周回していると、途中で一人の女性が眠っていた。

　 をかけた神官だ。彼女を見て、ぴんと来るものがあった。

「もし、起きてください」

　揺さぶり起こすと、あっさりと意識を取り戻した。初対面のはずの彼女は、案の定マノンの顔を知っていた。

「あ、列車のお客さんですね。マノン様ですね。なんで、また外に？　私、マノン様を外出させましたっけ？」

「この騒ぎですから、少しばかり興味がひかれまして。ご一緒に出ようとお話ししたではありませんか。そこを魔物に襲われて、なんとか事なきを得たんです」

「んん？　そ、そうでしたっけ……」

　口から出まかせな内容に乗せられる。メノウに気絶させられた後に外に出されたので、前後で混乱していた記憶が変な具合で補完されてしまった。

「あれぇ？　エルカミ大司教が別人に……って、そんなことあるわけないか。私、なんか変な夢を見ていて……うん。そうですよね。待ってください。いま、外から開けますから」

「はい、お待ちしています」

　答えになっていないことに気がつかず、フーズヤードは『龍門』の転移陣を起動させる。壁一枚分の、ごくごく短い【転移】。

「どうぞ、通り抜けてください」

「ありがとうございます」

　起動した光の扉をマノンはすり抜ける。

　中でなにが起きているかも知らず、充満する霧とともにマノンは大聖堂に滑り込んだ。

　メノウと の戦いは、紋章魔導の打ち合いから始まった。

　駅舎内という、間合いが限定された空間。熟練した戦闘員ならば紋章魔導よりも、ナイフを振るうほうが早いはずだというのに、二人は数秒の間に紋章魔導を放ち合う。

　両者ともに、卓越した魔導の使い手。魔導の構築速度は互角といってよかった。

　互いの効果を打ち消し合った紋章魔導の衝撃の余韻が収まる間もなく、先手を打ったのはメノウだった。

　太ももから引き抜いた短剣の切っ先を繰りだす。紋章魔導発動から刺突の動作への移行には、瞬きの も挟んでいない。

　 は なく教典を盾にした。

　表紙を金属補強された重厚さは、短剣の重さ相手ならば盾として不足はない。ぎぃっと金属同士が削り合う、嫌な音が響く。

　ささやかな不快音で二人の動きが鈍るわけもない。左の教典でメノウの刺突をさばいた が、逆手に持った右の短剣で を刺し貫きにくる。

　防ぐべき場面、メノウは脚を上げた。

　 まで う編み上げの革のブーツ。魔導具でこそないが、職人技で造られた良品だ。これもまた、防具足りえる強度がある。刃を立てなければ切断はかなわないブーツを使って刃筋をそらして斬撃を受け流す。

　ブーツで の刃を弾きながら、メノウは体重を前に。大きく上げた足を勢いよく落とす。

　相手の足を踏み砕こうという勢いは、後ろに引いた動きでかわされた。

　だぁんッ、と床が震える。踏み込みを震脚に変えて、鋭い刺突で追撃。胴体を狙ったメノウの突きに、今度こそ が大きく後ろに飛びのいた。

　連撃はかわされた。だが単純な正面からの攻撃で仕留められるとは思っていない。

　いま が下がった間合いが欲しかった。

『導力：接続──教典・二章五節──』

　メノウの意識は、すでに左に抱えた教典に入り込んでいた。

　踏み込みと同時に構成していた教典魔導。高等魔導具である教典が導力光の輝きを放つ。

『発動【ああ、敬虔な羊の群れを囲む壁は崩れぬと知れ】』

　 を向こう側にして、展開された白い壁が部屋を分断した。

　この聖地を構成する壁と同質の魔導は、元からあるべきものであるかのように部屋に んでいる。

　当然、 は壁の向こう側だ。魔導は攻勢魔導よりも防御魔導のほうが優性である場合が多い。教典魔導の防壁となれば、砕くのは困難な強度になる。 はモモやアーシュナのように導力量に優れているわけではないから、メノウと同じく力ずくには弱いはずだ。

　防壁の顕現は十秒ほどが限界だ。

　その間に攻撃を畳みかけるため教典魔導の発動に集中しかけたメノウは、はっと空気の流れを肌で察知する。

　鼻先に、白刃が迫っていた。

「ッ!? 」

　なにが起きたかわからない。心臓が止まるほどの驚愕。思考が追いつく前に、命の危機を避けるために体が勝手にのけぞる。まっすぐに突き出された刃はメノウの額をかすめた。

　鈍色の切っ先から、柄、持ち手と無意識のうちに動きを追い、刃の持ち主の姿を が える。

　短剣を突き出した と、目が合った。

「……運がいいな」

　ただの偶然で必殺をかわされたことに、さほど感慨もない声だった。短剣を持つ手首が返される。

　今度は 。なぜ分断したはずの がこちら側にという疑問をねじ伏せ、メノウは身をよじる。無理な動きに体勢が崩れるが、許容範囲だ。部屋を分断していた防壁の魔導を解除。今度はメノウが壁際まで下がって距離をとることに成功する。

　 は出入り口を陣取っていた。片手で短剣を構える姿に、隙はない。

　氷塊が の に落ちた気分だ。

　先ほどの一撃。気がつくタイミングが一瞬でも遅れていたら、眼球から脳髄まで貫かれていた。ずっしりと全身が重い。自分の攻撃が上手く決まったという希望から、続けて二連続の死の恐怖。落差に精神が削られていた。

　メノウは駅舎内に視線を巡らせる。

　確かに を壁の向こう側に押しやったはずだ。その がなぜメノウに攻撃できたのかが理解できない。

　まさか強靭な防壁をすり抜けたわけでもないだろう。導力迷彩にしてもおかしい。先ほど戦っていた には、確かな手ごたえがあった。入れ替わる暇があったとも思えない。

　部屋の中に、メノウは一つ違和感を発見する。

「……あれは」

　先ほどメノウが分断した向こう側に、 の教典だけが落ちている。

　入れ替わりのトリックの種が見えた。メノウの口からうめき声が漏れる。

「【導枝】……！」

「そういうことだ」

　メノウを出迎えたのは、最初からアカリに擬態した【導枝】だったのだ。

　 の短剣に刻まれた二つの紋章魔導の内の一つ【導枝】。 は導力の枝を操り、導力迷彩で自分の姿を映したのだ。ひと手間増えるが、虚像しかつくれないメノウとは違い実体ある偽者をつくり出せることになる。

　アカリから に姿を変えたことで、メノウは目の前にいた人物が本物だと信じ込んだ。先入観を利用したトリックだ。

　恐ろしいことに導枝は声帯を模した構造をつくり出して操作することで声まで出していた。メノウと切り結んでみせたことといい、分身といっても過言ではない精度だ。

　いま出入り口を陣取っている は、本物か。

　答えは『わからない』だ。

「……」

　ふうっと静かに息を吐く。

　 っても有利になることなどなに一つない。 の手札が一つ、見えた。そう考えればいい。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【疾風・導糸】』

　風が吹きすさぶ。メノウの短剣から伸びた導力の糸が不規則に部屋中にはためく。

　不自然に引っかかる場所は、ない。

　他に実体がないのならば、あそこにいる が本物だ。メノウは紋章の発動を止めると同時に突っ込む。

　頸動脈を狙った一撃を、 は短剣で受け止める。

　先ほどから打って変わって、魔導なしの短剣同士の斬り合いにシフトする。大きく動くことはない。近距離での、両者一歩も譲らぬ短剣同士のぶつかり合い。手で腕を払って軌道を逸らし、刃をぶつけて火花を散らす。

　強い。ひやりとする場面もあった。油断はできない。

　だが強い違和感がある。

　届かないと、思えないのだ。

　いま戦っている相手は、メノウと同等だ。あの と戦っているはずなのに、この程度なのかという違和感が拭い去れない。

　もっと隠した手札が、悪辣な罠が、圧倒的な魔導があるのではないか。メノウの基礎をつくった人物こそが だ。予測もできない策があっておかしくない。

　だというのに、目の前の人物の強さは──たかが知れている。

『 』。

　生きた伝説。人の形をした処刑執行者。

　人生最大の難敵と戦っているはずのメノウは、彼女に勝ててしまうビジョンが見えた。

「メノウ。お前はなにをしに来た」

「……アカリを、殺しに」

　戦闘中の問いかけに、答えてしまう。答える余裕があった。

「トキトウ・アカリを殺す？　くだらん。期待外れな答えにもほどがある。 を裏切る決意はついて、なぜそこで止まる。なぜ、死別以上のものを求めない？　人を殺す。それしかできないのか？　お前も、そこで止まるのか？　この私と、同じように」

「どうしろって言うんですか！」

　戦いの最中に叫ぶなど、いつ以来か。殺意とともに放たれる彼女の言葉にたまりかねて叫び返す。叫び返す程度の余裕を持って戦えているという事実が、どうしてかメノウの焦燥感を募らせる。

　助けろというのか。アカリを。メノウが。

　人を殺して生きてきた、処刑人が。なぜ、自分と同じ道を選んだはずの がいまのメノウを責めるのか。

　自分は人を殺した。だから人を救う資格などない。

　アカリに似た立場の人を多く殺した。アカリと彼らの違いなど、殺せたか殺せなかったかの違いでしかない。

　アカリを、たまたま殺すことができなかった。

　だから三か月間の旅路があった。もしもアカリが死なない純粋概念を持っていなかったら、グリザリカ王国の王城内で関係を構築することなく終わっていた。メノウもいまだ、自分の生き方に疑いを持たずにいたはずだ。

「人を助ける資格なんて──私には、ないじゃないですか！」

「資格などいらん」

　そんなメノウの言葉を切って捨てた。

「私とまったく同じで、なんになる。なんにもならないという人生は、十分に見せたつもりだ」

　あまりにも らしくない言葉に、息を呑む。

「なにを、言っているんですか……？」

　人殺しだから、人を殺し続ける。そこで止まれば、 『 』と変わらない。

　人を殺し続けた道には、なにも残らない。

　ただただ、後にも先にも赤い跡が続くだけだ。

　メノウはそれしか生きる道を知らない。同じ道を歩いて、さらに先に進んでいるはずの の言葉が的確にメノウの本質を引きずりだす。

「清く正しい神官にもなれず、無情で人を殺す悪人にもなれず、お前は何者になるつもりだ？」

「どうしようもないから、私たちが殺しているじゃないんですか!? 」

「そうだ。どうしようもない。召喚された異世界人は になる。世界は星から概念を収奪するために 化を促す始末だ。本当に、この世界はどうしようもない」

「じゃあ、アカリだけ助けるのは、道理になりません」

「バカか。理屈で考えるから、そうなる。まずは自分の感情を見ろ、メノウ」

　ふっと目の前の の姿が消え失せる。導力迷彩だ。わかっていても、眼前で視覚を欺かれると戸惑いが生まれる。

「友を助けることは、世界を滅ぼすに足る」

　 の言葉を直視すれば、なにかが砕ける。

　よりにもよって、誰よりも処刑人のはずの 『 』が、メノウにアカリを助けろと言っている。その事実を聞かされ、脳みそに麻痺が走る。思考がしびれていく。

　だから聴覚には頼らない。意識して遮断する。

　視覚から消えた に、メノウは逡巡を挟むことなく嗅覚で追った。

　煙の臭いがしていた。

　ここに来た時に真っ先にアカリの姿を偽った導力迷彩を看破できたのは、懐かしい煙草の臭いがしたからだ。

　メノウは がごく稀に煙草を吸うことがあることは知っていた。

　人は自分の体臭に無自覚だ。嗅覚を頼りに、背後に回った気配に短剣を きつける。牽制のための一撃は、なぜか が持つ短剣を弾き飛ばしていた。

　きぃんと音を立てて、 の短剣が真上に上がる。

　勝機を見つけ出した。

　メノウはしゃにむに手に持つ短剣を差し込んだ。

　 は無手。短剣を弾かれた衝撃で体勢も崩れている。抵抗のそぶりがない。本当に、なにもない。このまま刃を進めれば、メノウの刃は の首に突き刺さり、確実に致命傷を与える。鮮明に未来予想図が に く。メノウの短剣が頸動脈を貫き、首から鮮血を噴き出す の姿がはっきりと見えた。

　殺せる。

　自分が、 を。

　この人を。大きく口を開けて笑う人を。幼いメノウを引き取った人を。一緒に旅をした人を。頭に手を置いて、乱暴に髪を撫でる人を。自分がなりたいと思った人を。

　殺、す？

「──ぁ？」

　吐息とともに、メノウの口から疑問符が吐き出された。

　信じられないことが起こった。

　メノウは の命を奪えた切っ先を、強引にずらしていた。

　頸動脈を貫くはずだった短剣は、空を切った。伸びきった自分の腕、短剣の刃先が見える。振り抜いた残身の姿勢のまま、メノウの思考とともに世界が静止しているかのようだった。

　なにを、やっている。

　疑念が空白となって、メノウの心を占有する。

　自分で、なぜなのかという理由がまるでわからない。いま自分がやったことが、信じられなかった。 の死にざまを想起した瞬間、避けた。殺し合っていた相手の死を、避けてしまった。判断したわけでも、決断を下したわけでもない。

　体が、勝手に動いた。

　人を殺すのを、避けたのだ。

　幾人もの『善い人』すら殺してきた、自分が。

　三か月の旅で、友達になったアカリを殺しにきた自分が。

　頭が真っ白になる。脳みそがしびれて、思考が完全に停止した。

「くはっ」

　メノウが止まろうが世界の時間は止まらない。 が大口を開けて笑う。

　メノウが弾き飛ばしたはずの短剣が、くるくると回転しながら の手元に落ちてくる。そこにあるのが当然と片手でつかみ取った刃に が導力を流し込む。

　無理やり短剣の軌道を逸らしたせいで、メノウは全身隙だらけだった。 の発動させる魔導を茫然と見つめること以外、なにもできなかった。

「どうも、殺さないでくれてありがとう」

『導力：接続──短剣・紋章──発動【導枝：寄生鷲の種】』

　ぱん、と小さな音がした。

　導力銃によく似た発砲音が、 の短剣から鳴った。

　肩に、痛み。なんだと視線が動く前に、メノウの内部で導力の実がもぞりと き芽吹く気配をみせる。メノウの血肉と導力を吸うために根を張り巡らせる。

「ッ！」

　ようやく思考が起動した。命の危機に心よりも訓練された体が動く。

奥歯を みしめる。悔恨ではない。後悔などしている暇はない。来たるべき痛みをこらえるため、歯を食いしばる。



　すでに芽吹き始めた根が体内に入り込んでくる。即座に覚悟を決めたメノウは、自分の短剣を肩口に突き刺した。核の部分を指で挟み、肉が引きちぎれる激痛を無視して引き抜く。

　 ではなかった。さっき突き刺せば、勝てた。殺せた。

　息を荒らげながら、かろうじて導師をにらむ。

　人を殺すことを、ためらったのだ。 との会話で自分の感情を見つめたせいか。それとも他の要因か。

　メノウが殺せなかったから、 は生き延びた。

　吐き気がした。人を殺した時以上に、自分が人を殺すことを避けたことに対しての自己嫌悪ががんがんとした頭痛になって脳内を叩く。肩の痛みなどどうでもよくなるほどの負荷が精神にかかる。

「それで、お前はなんなんだ？」

　あなたが育てた処刑人です。

　そう答えることは、できなかった。

　誰かを助ける資格がない。だからアカリだって、殺しに来た。

　そう言っておきながら、自分は人を殺すことをためらった。

　力量の問題ではない。 を殺すことを、心が拒否したのだ。

　この間違いは、決定的だ。

　処刑人として人を殺し続けたメノウの中で、なにかが砕け散った。抵抗する気力が、根こそぎなくなった。

　殺せたのに、殺せなかった。殺すべき相手を殺せなかった。

　自分の流儀を曲げた代償は、あまりに大きい。

　メノウの心を折り砕いた が、気力が失せた様子につまらなそうに目を細める。それでも彼女はメノウとは違う。人を殺す動きは止まることなく、短剣を振り上げた。

　メノウは けない。避ける気力が失われている。

　死ぬ。

　しびれて脳が麻痺したまま、非現実感に支配されたメノウが死を賜ろうとした時だ。

「状況はつかめませんが……」

　場違いなほどおっとりした声が聞こえた。

　メノウのみならず、 の視線まで声の主に向けられる。

　駅舎の扉の から、なぜかマノンが顔をのぞかせていた。メノウと目が合った彼女は、ひらひらと しそうな顔で手を振る。

　いつも通りの着物姿の彼女の手には鉄扇が握られている。リベールで戦った時にも使用された、護身用の武器。彼女の鉄扇には、紋章が一つだけ刻まれている。

『導力：接続──鉄扇・紋章──』

　メノウや に比べれば、ゆっくりとした紋章起動だ。後追いでも余裕で追いつける魔導構築速度。だが目の前に戦っている相手がいるために、二人ともマノンの攻撃を止めることができなかった。

　たおやかな笑みを浮かべたマノンが、二人の戦う室内に向けて導力光に輝く鉄扇を振りかぶる。

『発動【風刃】』

　鉄扇を振り抜き、ふわりと風が動いた一瞬後。

　なにもかもを台無しにする旋風の刃が吹き荒れた。

　音が、鳴りやんだ。

　マノンの一撃をしのいだ は、室内の様子に顔をしかめる。

　紋章魔導【風刃】による、逃げ場のない室内での範囲攻撃だ。複数の風の刃が渦巻いた攻撃。モモほどの導力量があるのならば導力強化でしのげてしまうが、普通ならば八つ裂きである。 でも一度攻撃の手を止めて【障壁】の紋章を発動させる必要があった。

　それはメノウも同じだ。マノンの【風刃】自体は神官服の【障壁】でしのいだ。

　違うところがあるとすれば伏せた状態で【障壁】を展開させて受け流した と違い、メノウはわざと立ったまま風の刃を受け止めて吹き飛ばされた。

「意外と、生き汚いな」

　マノンの攻撃の衝撃を利用して、メノウは逃げ出した。

　心を折り砕いたと思ったのだが、生きる気力があったようだ。普段は閉じている大聖堂の出入り口だが、マノンが使った直後とあって通り抜けることができたらしいのも運がいい。

　点々と残る血の跡を見れば明らかだ。逃げ出した直後は余裕がなくともさすがに途中で偽装するだろう。

　とどめを刺し損ねた。状況をひっかきまわした張本人に視線を向ける。

「マノン・リベールか。そんな体で、よく聖地に入り込もうなどと思ったな」

「入り込む？　これはまた、不思議なことをおっしゃりますね」

　 の詰問を前にしても、マノンは落ち着いたものだ。 から出した鉄扇を口元に、いつもとなんら変わらないおっとりした口調で弁舌を立てる。

「とやかく められるいわれがありますか？　わたくしは最初から『盟主』さまの付き添いとして正当なルートで大聖堂に入っていますのに」

「ほう？」

　 は彼女の隣へと視線を向ける。マノンが入ってきたのを察して、出迎えに下りてきたのだろう。カガルマがそこにいた。

　彼がメノウの侵入を手引きしたことなど、わかりきっている。『 』の たる彼は、ふっとニヒルに笑って胸を張る。

「万事、彼女の言う通りだとも！」

　即座に話を合わせてみせる対応は、マノンがにこやかな微笑みを浮べたままカガルマの背中をつねっていなければ格好がついたのかもしれない。

　どうせ殺しても死なない男だ。カガルマの存在を無視する。

「百歩譲ってそれでいいとして、この魔物騒ぎの責任も、とる気はないと」

「ええ、ございません。 の魔物も聖地を攻める気概を持つなど、果敢なものだと感服するばかりです」

「外には『 』の小指がいるようだが？　お前は のお気に入りだ。奴が南の『 』とつながったせいで、大聖堂まで霧が入り込んでいるぞ。おかげで聖地の結界の効果が死んでいる」

「まあ！　おてんばさんですね、あの子も」

　魔物襲撃の真実は、結界の効果を相殺してマノンが聖地に入れるようにするためだけのものだ。おおむねマノンの狙い通りの結果になっているのだが、そんな真相はおくびにも出さず典雅に笑う。

「でも今回の騒動には他に指揮者がいたのでしょう？　きっとあの子がお遊びでそそのかしたどこかの誰かですね。わたくし、今回は仲間外れにされてしまいました。悲しいです」

　これが、わざわざサハラを魔物の群れにまぎれさせた理由である。 だけのために別の首謀者としてサハラを利用したマノンは袖を目元にあてて、わざとらしくシクシクと嘆く。

　 はうろんな目を向ける。

「あくまで、関係ないと」

「はい」

「いまさっき邪魔してくれた件は？」

　泣き真似を止めて袖を下げたマノンは、にっこりと笑う。

「お母様の を前にして、むしゃくしゃしてやりました」

　堂々と、そんなことを言いきった。

　 の召喚魔導によって発生し続ける霧に包まれた、聖地周辺。

「……」

　田園部に転がる魔物の死体の陰から、こそこそと顔を出したのはサハラだった。

　一度は濃霧に紛れた彼女だが、こっそりモモとの戦闘跡に戻ってきた。

　なにせ肉体をつくった時に全裸だったために、服が必要だったのだ。恐るべき魔導行使者であるエルカミも憎きモモもいないことを確認した彼女は、周囲から裸体を隠す霧に感謝しつつもごそごそと自分の死体から自分の服を ぐという正気がゴリゴリと削れる作業をする。

「もう付き合ってられない……。このまま からも逃げようそうしよう」

　これは断じて、モモから逃げているわけではない。自分が逃げるのはあの小さくも恐ろしい怪物『 』の手から逃れるためだ。逃げた後をどうするかは決めていないが、かなり痛い目にあったサハラは特に計画性の もない逃亡を決意する。

　サハラが自分の心を納得させて修道服に着替え終えた時だ。

　前方に、気配を感じた。

　サハラは警戒の視線を向ける。足音の重量感からして魔物ではない。霧の向こうに見える輪郭も人の姿をしている。方向からして聖地から出てきているあたり、もしや追撃の神官でも派遣されたのかもしれない。

　また戦闘になる可能性に備えて身構えていたサハラは、霧の向こうに見える相手に違和感を覚えた。

　よろめいている歩調。左手で右肩をかばっている姿勢。どうやら をしている。追撃というよりかは、敗残兵の様相を呈している。

　弱った神官なら、適当に見逃せばいいかと霧に潜もうとしたのだが、徐々にはっきりする輪郭にサハラの目が吸い寄せられる。

　身長はさほどないのだが、頭身と手足の長さのバランスがいいのか、立ち姿にはやけに存在感がある。ひらりとはためく神官服は太ももまでスリットが入るという改造が施されているのに、過度に派手ではなく実用性と見栄えが両立していてよく似合っていた。

　なにより、やたらと顔がいい。

　きれいな肌に、長いまつ毛に縁どられたぱっちりとした瞳。黒いスカーフリボンでくくった栗毛の髪も細く、艶やかだ。

　まるでサハラがこうなりたいと頭の中で描く理想像が二本足で歩いているかのようだ。数秒見とれてから、はっと我に返る。

　サハラも知っている相手だ。

「め、のう……？」

　やたらと美人だと思ったら、メノウだった。図らずも呼びかけになってしまった声に、メノウが顔を上げる。

「……サハラ？」

　霧のせいか、傷の深さゆえか、向こうも気がついていなかったらしい。

　メノウとサハラが向き合った。

　無我夢中で逃げていた。五里霧中の心境だった。

　自分でえぐった肩が痛む。いままでも負けることはいくらでもあった。戦略的な撤退は数知れない。

　だが、これほど千々に乱れた心境で逃げるのは初めてだった。自分の中の感情がこれほど分裂してぶつかりあっている心境になったこと自体、生まれて初めてなのかもしれない。

　メノウは泣いた記憶というものがない。 に連れて歩かれ、修道院で厳しい訓練をこなしながらも、大切なものをなくして涙を流した覚えが一つもない。もしかしたらなくした幼少の頃には泣き叫んだ日もあるかもしれない。だがメノウの記憶に、悲しみで自分が泣いたということはなかった。

　それは単純に『なにかを守りたい』という気持ちを抱いたことがなかったからだ。

　アカリとの友情が、きっとそうだと思った。自分の手でアカリを殺したら、泣いてしまうだろうと思っていた。

　違った。

　メノウにはアカリと出会う前からあったのだ。

　 『 』との思い出こそが、メノウの殺意を最大限に鈍らせた。

「……ふ、ふふふ！」

　笑いが込み上げてきた。自分の無様さが無性におかしかった。

　あとには引けないと覚悟していたはずだった。自分の命など、捨てにきた。精根尽きて、肉体をすり減らして、紙を丸めるみたいに潰れて死ぬまで全力を尽くすつもりだった。

　それなのに、殺せなかった。

　 と戦った。出た結果は、勝ち負けですらなかった。負けて殺されれば、それはそれで悔いがないはずだった。

　 の首から刃を逸らした瞬間が、いつまでも頭の中に居座っていた。

　──どうも、殺さないでくれてありがとう。

　メノウの心を粉みじんにした一言が、延々と巡り続けている。

　確実に殺せる場面で、殺せなかった。勝てば、目的のための障害はなかった。塩の大地に行く道は開き、難敵である大司教は聖地の外にいた。北塔に閉じ込められているアカリを連れて行けば、すべてに決着をつけることができた。

　万事が成功する道を自ら捨てた。

　だというのに、だ。

　メノウは を殺さなかったことを、決して後悔していないのだ。

　もちろん理性は刺し殺すべきだったと主張している。どうするべきなのかは即答できる。目的に即した正しい答えを、頭でははじき出せる。模範解答は誤ることなく存在している。

　だが、理性の通りに行動できるのかと問われた時に、メノウの心は答えを出せずにいた。

　いますぐにでもアカリの純粋概念【時】の魔導で を刺し殺そうとした瞬間に舞い戻ったとして、現在進行形でメノウを苦しめる失態を拭い去れる機会を手渡されたとして──それでも、同じように短剣を逸らさないでいられるかといえば、わからないのだ。

　そんなことがあるのだろうか。

　目的のための正しい行動はわかっているのに、正解を選べない。

　人を殺してきた自分が、禁忌だというだけでなんの罪もない異世界人を殺してきた自分が、アカリを殺すと決めた自分が──よりにもよって 『 』を殺せない、だなんてことが。

　想定もしていなかった現実が、あったのだ。

　メノウは、 『 』を殺せない。

　それが事実だ。

　自分の滑稽さに笑おうとして、唐突に吐き気が込み上げた。

「ぅえ」

　喉元を押さえて、  きを繰り返す。吐しゃ物は出てこない。胃がひっくり返っているのに、吐き出すものがなにもない。もともと塩の大地に転移した後は を待ち受けて潜伏する予定だったために、胃を空にしていた。

　だがいまのメノウには、吐き出すものすらない自分の空虚さを示している気がしてならなかった。

　自分の腹の中に、真っ赤な虚無があった。自分が歩いていた、赤い足跡。それがまとめて蒸発して虚無と化し、メノウを飲み込もうとしていた。戦いようもない、殺しようもない、言葉すらない虚無。薄っぺらいほど恐ろしい ろは、メノウの人生そのものだ。

　人を殺せない処刑人に、なんの意味がある？

　メノウは短剣を逸らした瞬間に、自分の生き方を自分で否定した。他でもない自分が、自分自身を裏切った。

　それも、最悪な形で。一歩も前に踏み出せず、過去の赤い足跡をも無視して、ただ刃を放りだした。 との会話で情を引きずり出されて、人を殺せなくなった。

　死にたかった。

　違う。死にたかったのなら、あの場で突っ立っていればよかった。

　なのに、どうして逃げたのか。

　自分のすべてが、信じられなくなって立往生していた時だ。

「め、のう……？」

　声が、聞こえた。

　メノウは顔を上げる。霧に囲まれた中、サハラがいた。

「……サハラ？」

　ああ、ここまでか。

　諦観よりも、感謝が湧いた。偶然の出会いが必然の救いに見えた。

　 に負けて、命からがら逃げる途上でサハラに殺される。脈絡もない最期の道筋が、すんなりとメノウの胃の腑に収まった。

　この状況は、サハラにとって絶好の機会だった。

　いまなら誰だってメノウを殺せる。

　戦えば、まず間違いなく勝てる。それが確信できるほどにメノウは弱っている。体も心も衰弱しきっていた。

　だというのに、サハラが吐き出したのは攻撃するための銃弾ではなく問いかける言葉だった。

「……なにを、やってるの」

　明らかに負け姿のメノウを見て、サハラの声が震える。無意識に握った右腕の義腕が、ぎしりと音を立てる。

「 に負けたの。我ながら、情けないわ」

　メノウが笑いながら答える。

「実力で、負けたわけじゃない。なのに殺せなかった。友達を殺してみせるなんていう目的で来た分際が、人を殺すことしかできない処刑人のくせして──よりにもよって、敵対した を殺すのをためらった。バカみたいな負け方だったわ」

　メノウの負け様など、サハラの知ったことではない。

「アカリちゃんを助けに来たんじゃないの？」

「……まあ、広義にいえば、そうかしら」

「もう時間、ないでしょ」

「ないけど」

　肩の傷を押さえるメノウは、悔しさを見せずに答える。

「負けたのよ」

　負けた。

　だから、なんだ。

　サハラはメノウの をつかんだ。メノウはロクに抵抗しなかった。失血の続いた肉体に体力は残っておらず、戦いの果てに導力も使い切っている。されるがままだ。

　カッと頭に血が上った。サハラが義腕を振り上げ、メノウを思いっきり殴りつける。

　メノウはのろのろと自分の頰を押さえる。痛みを感じているのかすら怪しい、ぼんやりとした動作だ。

「……それだけ？」

　なぜ、こんなに甘い攻撃をするのか。いまの自分が欲しいのは、こんなものではない。そう言わんばかりだ。

　アカリを助けようとして、 に負けた。ある意味では順当な結果だ。メノウは に順当に負けて、命からがら敗走している。

　ここでサハラがとどめを刺せば、すべてが終わる。サハラがすべてを終わらせることができる。

　千載一遇のチャンスを前にしながら、サハラはなぜかメノウを肩に いでいた。

　このままだと野垂れ死にしかねない程度には傷を負っていたメノウは、サハラの肩の上であえぐように疑問符を上げる。

「なに、してるの……？」

「知らないわよ！」

　サハラは怒鳴り返していた。

　サハラにメノウを助ける必要などない。むしろ、ここでとどめを刺すべきだ。

　だが。

「死にたそうな顔をしているあんたを殺してあげるほど、私、素直じゃないのっ」

　いまのサハラを占める感情は、一つだけだ。

「気に入らない、気に入らないっ、気に入らない！」

　ぶつぶつと無意識に毒づく。自分だって、どうして助けているのかわからない。サハラは延々と毒づきながら近くの修道院に、メノウを引きずっていく。

　気に入らないことだらけだ。サハラの人生は、ずっと、気にくわない事象にあふれている。

「メノウが私以外に負けるなんて、もっと気に入らない……！」

「そんなこと言われても……負けてばっかりよ、私なんて」



　メノウがサハラに負けていたのは、幼少期だけだ。そしてメノウはサハラ以外にも山ほど敗北を積み上げている。そんなこと、サハラだって覚えている。

「うるさい！」

　 みつくように叫ぶ。負け犬の反論なんて一言だって耳に入れたくなかった。

「だいたい、メノウは諦めがよすぎるっ」

「私が？」

　諦めがよければ、こんなところにいない。アカリを諦めないためにここに来たのだと、目で不服を訴えてくるが、サハラはまったく納得していなかった。

「諦めが悪い奴は、そんな綺麗な目をしない」

「……どういうこと？」

「どうせ、自分は精いっぱいやったとか、これ以上は望むべくもないとか考えてるでしょ」

「……悪い？」

「悪いに決まってる」

　即答すると、むっつりと口をつぐむ。割りきりのよさは数少ない自分の美徳のはずだと言わんばかりだ。

「メノウがそんなのだからっ」

　霧の中、田畑を突っ切ったサハラは修道院の玄関に着いた。

「私は、あんたが大嫌い」

　人にいい顔して、その 、なにも感じない。メノウを動かしているのは使命感で、義務感だ。

　泣かない。怒鳴らない。愛想のいい笑みばかり浮かべている。いつも冷静で、落ち着いている。

　メノウはいつも綺麗だ。

　それがムカつく。

　こうして傷ついている時すらも──美しさが勝る。

「顔のいいやつは、これだからムカつく」

「えぇ……？」

　理不尽な言動にメノウが困惑していた。

　サハラの知ったことではなかった。

　嫌いな相手の不細工な顔を見たいと思って、なにが悪い。泣くなら、顔をぐしゃぐしゃにして泣け。怒るなら、もっと繕わずに怒れ。心の底から、そう思う。

「理屈ばっかで動くから、自分の感情がわからなくなるのよ」

　怒りで息を切らせたサハラが、修道院の入り口に手をかけた時だ。

「あ」

「え？」

　肩を貸していた、隙だらけの体勢。無人だとばかり思っていた場所で、修道院でシャワーを浴び終えたモモと玄関で遭遇した。

　不意のエンカウントに、三人の思考が固まる。

　モモの視線が固まるサハラから、負傷しているメノウへと移る。

　ぼっと音を立ててモモの瞳が怒りで燃えた。

「ちょ、なにか誤か──」

「──死ねぇ！」

　有無を言わせることなく、モモはサハラの顔面に拳を叩きこんだ。

　大聖堂の中で起こっていた騒動は、監禁されているアカリの部屋にも届いていた。

　だがアカリは、外に意識を向ける余裕を失っていた。扉は内側から開けないが、もし監禁されていなくてもアカリは外に出ることをしなかっただろう。

　 『 』に言われた言葉が棘となって胸に刺さっていた。

　繰り返せば繰り返すだけ、悪くなっていく時間。魔導を使えば使うほどに、記憶が れていく自分。無為な行動を重ねた報いは、確かにアカリを んでいた。。

　自分が自分でなくなっていく。

　魔導を行使する度に過去を忘れる。純粋概念の持ち主がその恐怖に打ち勝つのは、並ではない。アカリとて自分が自分でなくなっていく恐怖を乗り越えられたのは、確固たる希望と消極的な があったからだ。

　アカリは自分のことを諦めていた。

　繰り返す時間の中で、自分はどうなってもいいからメノウを助けるのだと。自分が死ぬことでメノウが生きるのだと決めていた。

　自分がいらない。メノウが自分を殺すことが彼女の助けになる。どうせ死ぬなら、自分の記憶なんてなくなっていいと考えていた。

　だから、自分のことを忘れても平気だった。

　メノウを救うために、彼女に殺される。そうしてメノウの中に残れるのならば、アカリはすべてを失っても惜しくなかった。

　だがいまは違う。改めて実感した、虫食いだらけの日本の記憶。すでに両親の名前を思い出せないという事実に、 が走る。

　初めてメノウと出会った時に、問いかけてきた問い。

　──あなた、どこの学校の何年何組!?

　自分が異世界人かどうか、確かめるための質問。それにいまは答えることが、できるのか。

「わたし、は……」

　セーラー服を着ていたし、どこかの学校に通っていたのは間違いない。自分は十六歳だから、きっと高校一年生だ。二年生では、なかった気がする。

　けれどもアカリの口から具体的な記憶が出てくることは、なかった。

　自分の肩を抱きしめて、ぶるりと震える。

　自分は、誰なのか。

　友達も、両親も、自分のことさえも思い出せない。記憶の連続性を失い、ぷっつりと失った過去からいまが始まっている。

　なにがあったのか、日本での自分はどんな人間だったのか。自分の名前はある。トキトウ・アカリ。それに間違いないはずだ。

「……ほんとうに？」

　当たり前の人生を思い出せない自分が、本当に であるのか。

「まだ……大丈夫だから」

　自分に言い聞かせる。

　この世界に来た時から、アカリの記憶は始まっている。何度も繰り返したこと。メノウと歩んだ旅程。メノウとの思い出が、トキトウ・アカリの人格を支えている。

　それ以外に、なにもないのだ。

　日本のことを忘れて、自分が異世界人であることも忘れて、果てはなにもかもわからなくなった になるまでは、まだ時間がある。

　同時に、メノウとの記憶がすべてだからこそ、これ以上の記憶を失いたくなかった。

　なんのために時間をループさせてしまったのかさえ忘れてしまえば、それこそ、なんのためにここまで来たのかがわからない。

　メノウは、メノウのことを助ける人のことを許せないと言った。だからメノウは来るはずだ。

　メノウを助ける自分を、殺しに。

　アカリの中で、二つの思いがせめぎ合っていた。

　来てほしい。

　メノウに終わらせてほしい。

　来てほしくない。

　メノウに生きてほしい。

　二つの思いがせめぎ合っている。そして 『 』に われて、ここで待つだけのアカリの願望は関係がない。メノウが来るか、来ないかは、メノウだけの意思にゆだねられている。

　来ないでほしいというアカリの嘆願は、メノウにすでに否定されている。

　だからメノウは来る。

　アカリにもどうしようもない。やり直すべきなのか。だがいまは、それすら許されない状況だ。純粋概念の魔導には制限がかけられている。監視をしている 『 』の隙を見て逃げ出せるとは思えない。

　どんなに に見えても、間違いなく、アカリはメノウのことを信じていた。いまのどうしようもなくなったアカリを殺しに来てくれるはずだ。

　それでも──メノウが死んでは、意味がない。

　やり直したいと願った最初となにも変わらない。

　メノウが死んで、モモも死んで、自分も赤黒い髪の神官に殺される。そんな最期を嫌だと思ったから、アカリは繰り返しているのだ。

　メノウと初めて出会った時に運命だと思った感情は、覚えている。

「助けてよぉ……」

　自分のためではない。

　メノウの生きる道がないかを探し求め続けるアカリは鼻声で顔を覆った。

　魔物の侵攻が原因で避難が行われ、本来ならば無人となっているはずの修道院の一室に三人の少女がいた。

　 との戦闘で傷を負ったメノウ、顔面に拳をぶち込まれて意識を飛ばしたサハラ、一人だけぴんぴんしているモモの三人だ。

　神官、神官補佐、修道女とある意味でバランスが整っている。怪我人であるメノウはベッドに寝かされていた。修道院にあった治療箱でかいがいしくメノウの傷に手当てを施したのはモモである。

　ここまでメノウを運んできたサハラといえば、修道院の出入り口で出会い頭にモモからテレフォンパンチを食らってから意識を取り戻していない。気絶した後、雑に引きずられて床に寝かされている。モモはとどめを刺そうとしていたのだが、さすがにメノウが止めた。

「先輩ー、やっぱりこいつは殺しておくべきだと思いますぅ。見るからにクソ禁忌ですし、聖地を襲ってきた主犯の一人ですしー！　本体の導力義肢をぶっ壊したら死ぬらしいので、チャンスですぅ！」

「いいから、置いておきなさい」

　サハラの処理について死刑で決着をつけようとするモモの頭を、ぽんぽんと でて落ち着かせる。いつもと変わらないモモの言動に、メノウはなんとか心の平静を取り戻していた。

　確かにサハラは禁忌を犯した。意識を失っているうちに始末するのが筋なのだが、助けられたこともあって先延ばしにしていた。

　いや、とメノウは心の中で独白する。

　助けられたからなんていうのは建前だ。もっと単純に、いまのメノウは、自分が人を殺せるかどうかすらわかっていなかった。

　 を殺せなかった時点で、どの面を下げて他の誰かを殺せるのだという感情が渦巻く。

　そろそろ目を覚ます頃かと様子を見ていると、タイミングよくサハラがはっと目を覚ました。

　ゆっくり上体を起こしながら、頭を振る。

「どうしてかしら。修道院に避難しようとしたら、なぜか偶然ばったり野生のピンクゴリラと遭遇する夢を──」

「ああん？　なんか文句あるんですか？」

「──訂正。夢じゃなかった。小型ゴリラと一緒の部屋にいるとか、悪夢よりタチが悪い」

　起き上がって早速、サハラとモモがバチバチとにらみ合う。なにせ数時間前まで殺し合いをしていた二人だ。和気あいあいとなるはずがない。

　ひとしきりにらみ合いが終わった。モモがメノウに目を向ける。

「それで、先輩はどうしてこんなところで、こんなやつと？」

　モモがもっともな質問をした。

　一通りの説明をした。

　カガルマ・ダルタロスに随行して聖地の大聖堂に忍び込んだこと。そしていざアカリの身柄を確保しようとしたところで に敗北したこと。敗走中になぜかサハラが手助けをしたこと。

　失敗した。

　ただ失敗しただけではない。 を殺すことを、避けた。まるで人を殺すことを う、普通の人間みたいなことをしてしまった。そのことも含めて、包み隠さず明かす。

「おかげで、どうすればいいかわからなくなったわ」

　自分はすでに、処刑人ですらないのかもしれない。

　メノウは 『 』の教えを守りそこなった。

　悪人になれば、なにも考えずにアカリを引き渡せた。それが正しい形で、それ以外のものを求める必要はなかった。処刑人であることを貫けば、 をためらいなく刺し殺せた。

　メノウの行動にあるノイズは、アカリが与えた変化だ。

　アカリの笑顔は処刑人であるメノウを変化させた。アカリとの会話は、メノウの心をやわらかくした。アカリという特定の個人のためにという甘くやわらかい行動原理で と戦ったせいで、いまのメノウは誰も殺せなくなるほどに信念をえぐられた。

「私が処刑人である意味を捨てきれないで、なのに誰よりも処刑人だった の教えに反した」

　アカリは、メノウのために自分の全存在を けてくれた。

　対してメノウはどこまでも だ。

　自分の命はいい。捨てる覚悟はできていた。だが処刑人としての自分を捨ててまで、アカリを助けようとは思っていなかった。いままでの生き方を捨てることをせずに、アカリを殺すことで解決しようとしていた。

　それでいながらメノウは、 を殺せなかったのだ。

　自分が持っていたはずの生きかたと実際に直面した現実との矛盾が、メノウの心を と囲っていた。

「ねえ、モモ」

「なんですか？」

「私ね、モモに善い人を殺してほしくなかったの」

「はい？」

　なんの話かとモモが小首を げる。メノウは構わずに心境を吐露する。

「戦う人間は仕方ないわ。神官も、騎士も、あるいは未開拓領域に出た冒険者や、向こうから襲い掛かってくる悪党ども。それを相手に回して、殺すななんて言えるはずがないもの」

　過剰な不殺はモモの身すら危なくする。

　処刑人の世界にいる時点で、メノウは殺人と暴力を容認した。機能としての殺人と暴力を容認しなければ、殺人者と暴力者にされるがままになる人々がいるからだ。

　少なくともメノウは、モモのほうが大切だ。だからモモが生き抜くために人を殺すことに はない。

　ただ。

「なんの罪も犯していない人。そういう人は、モモに殺してほしくなかったの」

　無意識にモモに託そうとしていた生きかたは、夢に見たメノウの理想だったかもしれない。

　だからメノウは、とっくに取り返しのつかない人間だ。夢見る人を夢に見るほど殺してきて、他人を殺すことに意味を探すほどに人を殺してきて──挙句の果てが、誰かを殺せない自分を見つけて、途方に暮れている。

「 の教えた道から一歩踏み外しただけで、自分の生きる道がわからなくなったのよ」

　出会った時から『運命だ』と言ったアカリ。彼女には、いまのメノウとは違うメノウとの思い出がある。アカリが自分の全部を賭けられると決心するほどの記憶だ。

　だからいっそ──メノウもそれほどの時間が欲しい。

　アカリがメノウを思うに至ったほどの、記憶が。噓もないつながりが。

　けれども、なくなった時間を知る などない。

「……バッカみたい」

　横合いからメノウの弱音を ったのはサハラだ。メノウとモモ、二人の視線がサハラに向かった。彼女は嫌味っぽく減らず口を叩く。

「うじうじして、悟ったようなこと言って、誰だって考える当たり前のことを特別みたいに話して楽しい？　自分の生き方がわからないで迷走するのだって、よくあることじゃない。自分でわからない？　はっ！　わからないなら、誰かに聞けば？」

　皮肉たっぷりの台詞は、サハラにとってみれば嫌味以上の意味はなかった。モモの目が尖り、怒りのままに小さな体が導力光に包まれる。

　だがメノウは。

「あ」

　膝を抱えるサハラを見て、メノウは不意に閃いた。いまの台詞を聞いて、革命的なほど革新的に求めていた答えを得る方法を思いついた。

　メノウは他人の感情を受け取ったことがある。ダイレクトに。言葉にならない情感も含めて。本人の経験を追体験したことが、確かにあった。他ならない目の前にサハラの情念を、メノウは体験したことがある。

　導力接続で。

　メノウも知らないアカリとの時間を受け取る方法が、そこにあった。

「……なによ」

　メノウの視線を受け続けていたサハラが、居心地悪そうに身じろぎする。

　見落とし続けていた答えに気がついた時、メノウはまず茫然とした。

　次いで、腹の底から笑いが込み上げてきた。

「あはっ、あはははは！」

　メノウが笑った。モモが目を丸くする。サハラは気味の悪そうな表情を浮かべる。

　二人の反応を受けても、メノウは目に涙を浮かべて笑った。

　ここに来る前の自虐のための笑みではない。

　弾けるような笑い声は、幼少から一緒にいるモモですら見たことない、若々しくて、 相応の少女の笑い声だった。

　胸のつかえが氷解していく。目的が組み変わる。先の見えない道が、一気に開けていく。

「あははっ、バッカね、私。最初から、あったのにね。そこに気づかなかったなんて、ほんと、バカ」

「せ、先輩？」

「ん？　ああ、うん。大丈夫よ」

　目じりに浮いた涙を指でぬぐう。

　目が覚めた。

　まず、モモの存在を感じる。次に自分の中にあるアカリとの記憶を思い出す。

　答えなんて、最初から自分の中にあった。自分にしかできないことで、アカリとならばできると証明されていることがあった。

　メノウの全身に血液がめぐる。自分の心臓の音を、久しぶりに自覚した。

「ありがとう、モモ」

「お礼なんてー！」

「……本当に、いらないと思う」

　ぼそりとした きに、モモが笑顔のまま無言で手近にあった椅子をサハラにぶん投げた。サハラは突然の強襲にぎょっとしつつ、義腕ではねのける。

　木製の粗末な椅子が砕け散った。修道院の備品がばらばらになりサハラの雰囲気が険悪になるも、モモは何事もなかったかのように問いかける。

「それで、どうしますかー」

「そうね」

　窓の外を見る。

　日が落ちた空には、星がちりばめられている。

　 に負けて、数刻。状況はなに一つ好転していない。

　それでも、自分の先が見えた。自然と笑みが浮かぶ。前に進む活力が生まれていた。

　自分が歩んできた、赤い道。いま立っている場所から、どう動けばいいかの答えは出ていない。けれども先にあるはずの道に踏み入る勇気を得るための方法が見えていた。

「もう一回、アカリに会いに行くわ。モモ。手伝ってくれる？」

「あったりまえじゃないですか」

　間もおかずに、きっぱりと断言した。

　どうしてここまで自分なんかに付いて来てくれるのか。後輩からの親愛がくすぐったく、嬉しくなる。

「サハラはどうするの？」

「帰るし」

　どこに帰る気だ。

　むちゃくちゃな発言に、あきれた視線を向ける。サハラはメノウの視線から逃れるためにか、体育座りの姿勢で膝に顔をうずめた。メノウを助けたことを今更になって後悔しているのだ。

「サハラ。アカリのこと、どう思っている」

「……いい子よね、アカリちゃんは。そこの暴力装置と違って」

「じゃ、協力して」

「はぁ!? 」

　驚きの声とともにサハラが顔を上げるが、スルー。強制的に巻き込むことを決定する。

　今度はモモに視線を投げかける。

「あんまり、聞けなかったんだけどね」

「はいー？」

「モモとアカリ、仲よくなれた？」

「ぜんぜんです。これっぽっちもです」

「あら、私のこと置いて一緒に旅をしたのに？」

「ぜん、ぜんッ、です！」

　二度続けてのきっぱりとした返答だ。強すぎる否定に、くすりと笑みがこぼれる。そうか、仲よくなったんだと不思議と納得できた。

　アカリは、そういう子だ。

　共感性が高く、 っこい彼女と一緒にいれば楽しい。ついついアカリの人柄に引き込まれてしまう。

「じゃ、これからもっと一緒にいられたらいいわね」

「……えぇ？　普通に邪魔ですぅ」

「そいつの千倍、アカリちゃんはいい子よね。私、アカリちゃん派だわ」

「やかましいです！　ていうか、お前は誰なんですかー！」

「え？　モモ、サハラのこと覚えてないの？」

　喧々諤々、 が統括していた修道院で過ごした三人で会話をする。ほんのささやかで、小さな同窓会だ。

　でも、足りないものがある。

　だからメノウは、まずはそれを取り戻さなければならない。

　アカリが知っていて、メノウが知らないもの。

　またメノウが歩き出すために必要なことが、見えた。

「あの聖地──消し去ってやりましょう」

「メノウがバグった」

　サハラが信じられないものを見る視線をメノウに向ける。モモも目を丸くしている。

「しかたないじゃない、必要だもの」

　世界最大の結界都市。

　まずは、それが隠しているものを全部むき出しにしてやる必要があった。

「 と戦うかどうかは、それから決めるわ」

　メノウはいまだ、 の死にざまが想像できなかった。

　 は強いから。殺せるイメージが湧かないほどに があるから。

　本当に、それだけだったか。

　 を大きく見る心が、中途半端に逃げ道をつくっていなかっただろうか。勝てないんだから殺せないという甘えが心になかったか。

「 と戦うとしたら……殺せますか？」

　モモが不安そうに問いかける。

「なんで、殺せないかもって思うの？」

「だって、先輩にとって って……」

　モモがためらいながら言葉を切って、意を決してつなげる。

「……あのおっぱい女より、特別な人じゃないですか」

　当たり前に指摘された言葉に、口元が微苦笑で られた。

　モモは、きっとメノウよりもわかっていた。自分にとって特別な人だから、メノウは を殺せなかった。そんな当たり前の人の心がメノウにもあるんだってことを、モモは知っていた。

　実力ではなく、 の底知れなさでもなく、罠だと思っていたわけでもない。メノウにとって 『 』は親と同じ特別な人だから殺せなかった。

　メノウの弱さをモモはずっと知っていた。

　メノウは、自分の心も知らなかった。

「バカよね、私」

「先輩がバカなんてこと、ありえませんー！」

「ううん。バカなのよ、私」

　本当に自分なんかにはもったいないほどによくできた後輩だ。メノウ自身よりも、メノウの心をよくわかっている。

　メノウはずっと、メノウ自身のことがわからなかった。

「大丈夫よ」

　メノウは断言する。

　自分はまだ前に進める。自分の中にないものを知れば、得ることができる。

「私は清くもないし、強くもないし、正しくもない」

　あの人になりたいと願ったのならば、メノウは誰だって殺せなければならない。

　でも結局メノウは『 』にはなれなかった出来損ないだ。

「そんな、悪い奴だもの」

　メノウは目を細めた。

　何度挫折しようと、自分に失望しようと、立ち上がれ。教えを破って、自分が歩んできた道のその先に行くために。

　自分を育ててくれた恩を仇で返そう。愛を語りながら、臆病で卑劣で卑怯で卑猥な手段を駆使しよう。正義のためでも、教義のためでも、平和のためでもなく──ただ、自分のために。

　まず殺すべきは、他の誰でもない過去の自分だった。

　処刑人でなくてはならないと自縄自縛で自分と他人の関係を決めた自分。

　貫いてきた自分の生き方にいまだ拘泥している自分を殺せば、次がある。

　世界のためでも平和のためでもなく、自分が悪人になるためのなんの慰めもない人殺しを始めよう。

　いつか自分が死ぬまで心にこびりつく、最低最悪の人殺しをする。

　自分が求めるための、自分勝手な人殺しをして。

　生きる道を見つける明日を、始めるのだ。